

銀座の街並みを 考える

主催・銀座通連合会

[第1回] 街並みは銀座の財産

銀座の街並みは、江戸時代と煉瓦街の構造を残す貴重な街並みです。それを銀座は大事に守り、美しい通りをつくりあげてきました。今後銀座の街並みはどんなふうにしていくべきでしょうか？

日時 2003年11月20日（木）16時～18時

場所 明治屋モルチエ 中央区銀座2-6-7 明治屋ビル3F TEL 03-3563-3601

- 基調講演「銀座の財産 —— 江戸・煉瓦街の街並み構造」岡本哲志
 - パネル・ディスカッション「銀座らしい街並みとは？」
 - 初田亨（工学院大学教授）
 - 岡本哲志（岡本哲志都市建築研究所）
 - 小坂敬（銀座通連合会副会長）
- ◎ コーディネーター 陣内秀信（法政大学教授）

<講師プロフィール>

蓑原 敬（みのはら・けい）

都市プランナー。蓑原計画事務所所長。東京大学教養学部で地域研究(アメリカ)、日本大学で建築を学ぶ。ペンシルバニア大学大学院に留学、アメリカの都市計画にふれる。建設省、茨城県で都市計画と住宅行政の政策立案と実施の現場を経験。著書に『成熟のための都市再生』『街づくりの変革』『街は要る』『街づくりとリーダーシップ』『都市計画の挑戦』など多数。

吉田不曇（よしだ・うずみ）

中央区企画部部長。1985年、中央区役所都市整備部地域整備課長として、住宅附地義務を含む指導要綱策定に参加。1988年、居住継続支援のコミュニティファンド策定に参加。1994年より中央区役所都市整備部都市計画課。1996年、日本橋・京橋・月島などの街並み誘導地区計画の都市計画決定に関与。1998年、銀座地区に機能更新型高度利用地区導入に参加。

三枝進（さえぐさ・すすむ）

銀座通連合会常務理事を経て、現在、銀座通連合会理事。ギンザのサエグサ代表取締役社長。銀座歴史研究者としても知られ、銀座に関する執筆・シンポジウム等多数。

陣内秀信（じんない・ひでのぶ）

法政大学工学部建築学科教授。イタリア建築・都市史。イタリアを中心に、イスラム圏を含む地中海世界の都市の特質を解き明かし、そこから得た視点で東京の街のありかたに提言を続けている。著書に『東京の空間人類学』『都市を読む*イタリア』『ヴェネツィア-水の迷宮都市』『都市の地中海』ほか多数。

竹沢 本日はお忙しいところ、また天候の悪い中、お集まりいただきましてありがとうございます。当初3階で行う予定でしたが、私どもが考えていたよりもたいへんご関心を持っていただくことができて、80名の方のお申し込みをいただきました。それでは3階に入りきらないということで、明治屋さんのご厚意によりまして、急遽この2階を貸し切っていただけることになりました。

お手元に、「銀座まちづくり関連の動き」をまとめた資料（巻末）をお配りしてあります。今日の話を書くときの参考にしていただければ幸いです。また、不足の事項がたくさんあると思いますので、あとでぜひ教えていただければ幸いです。

では最初に、銀座通連合会の遠藤彬理事長よりご挨拶いただきます。

遠藤 本日は足下の悪い中、こんなに大勢の方に来ていただいて、感激しております。日頃銀座通連合会では国土交通省と一緒に銀座通りの改修問題を議論し銀座の街並みを考えております。

銀座では、いろいろな開発が今後おこなわれていきますがその中で、今日基調講演をしていただく岡本先生が先日上梓された『銀座 土地と建物が語る街の歴史』は、どうして銀座通りがこのように成り立っているのか、間口の間隔はどうしてできあがったのかということ、歴史的に検証されておまして、こういうことを我々もしっかりとふまえたうえで銀座の街並みを考えていかななくてはならないと思っています。

今日は岡本先生のお話、そのあとのシンポジウムで銀座のまちについて語られるということで、たいへん楽しみにしております。今回1回に終わることなく、皆様方のいろんなご意見をお聞きしながら、銀座のまちをどういうふうにするに保っていくかということ、一緒に考えていきたいと思っています。

竹沢 では岡本哲志先生、基調講演をよろしく申し上げます。

●基調講演「街並みは銀座の財産」

岡本哲志

再生を繰り返す「銀座」

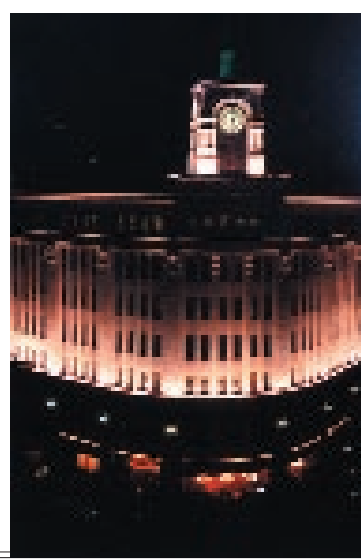
最初に私がどこで生まれたかという話をしたいと思います。私が生まれたのは、「銀座」から2～3分のところですよ。といっても、本家本元の銀座ではなく、全国に数百あるといわれるリトル・銀座のひとつですが、銀座という地名は幼い頃から親しみやすいことばでした。ただ、本家の銀座となるとなかなか足が近づきませんでした。いちばん最初に銀座を訪れたのは高校生のときですから、16歳か17歳くらいです。私が最初に銀座を訪れたときは、リトル・銀座とは勝手が違うので、どこをどう歩いているのかわかりませんでした。そういう人間が数十年後に銀座の研究をはじめたわけですよ。

銀座がほかの商店街とくらべて大変魅力的であるのは、500近くのリトル・銀座を生んできたことから明らかです。銀座は近代になってから都市再生を何度かやっています。最初は、明治初期に煉瓦街ができて、それ以降繁華街として急速に成長しています。これは江戸の商業空間から脱皮して近代的な繁華街を形成させたという意味で、現代的にいうと中心市街地活性化を実現させたことになります。もうひとつ、関東大震災では都心の下町が丸焼けになってしまいました。それをいち早くモダン都市として輝かせたのも銀座です。都市再生の鏡みたいな街ではないでしょうか。「東京行進曲」（作詞・西条八十）という昭和初期にできた歌がありますが、一番に銀座、二番に丸の内が出てきます。日本橋や神田が出ず丸の内が出てきた理由は、関東大震災で丸の内が奇跡的に被災を免れたために、昭和初期に丸の内は輝いていたからです。そして三番は浅草です。浅草は近代の洗礼をうけずに、門前としての江戸を再現していくことで活気を見せていきます。四番に出てくるのが新宿です。新宿は新興の街ですから、関東大震災があってもすぐ元気になる。この4つの都市のなかで、何度も火災にたたかれて、それでも復興しているのは銀座だけです。新しい先進性を持っているのも銀座だけです。全国の商店街が銀座に憧れ、その名を付けたのも頷けるのではないのでしょうか。中心市街地活性化もそうですが、装いも新たにしたいにもかかわらず、数年もしないうちに以前の方がよかったということになってしまうのが現状です。特に、古い街並みや建造物が残っていない商店街では、成功例がほとんどない。

どうしてこのように、かつての銀座が先進性を持ちながら、飽きさせない都市空間であり続けているのか。それは、たぶん西洋文化を横並びにスライドさせてきて都市を再生させても、こうはいかなかったら、というのが私の基本的な姿勢です。銀座は各々の時代に魅了していた欧米の街並みや建築を単に取り入れるだけではなく、



1 銀座通りの空撮



2 和光の夜景

江戸から連綿と続く歴史を切り捨てなかったことに大きな意味があると考えています。

銀座フィルターとは何か

私が銀座の研究を始めて、気になっている言葉があります。それは、銀座の方もよく口にされる「銀座フィルター」という言葉です。この言葉を最初に聞いたとき、抽象的ですが、非常に魅力的な言葉だと感じました。銀座の方が使う場合には、商いの場として銀座フィルターを使うと思います。たとえば、私の見解がまちがっていなければこういうことです。つまり、ファーストフードとか、銀座と何のゆかりもない店がポッと入ってきて、あまり拒まない。しかし銀座の街を育てるような店でなければ自然と消えていってしまうだろう。これが銀座の持っているフィルターだというように、私は解釈しています。

しかし銀座の歴史を十年間研究するうちに、実はもうひとつフィルターがあるのではないかと感じるようになりました。それは歴史に培われた、都市を再生させるエネルギーを吟味するフィルターです。これはまちづくりをしていく上ですごく重要なことだと、私は考えています。過去の歴史を切り捨てないで、次の新しい独自の先進性を見つけていく。これは銀座が常につくりだしてきた各々の商店のオリジナリティにつながるのではないかと思います。ですから銀座がつくり出した先進性というのは実はどこにもなくて、単なる欧米のコピーではないのです。これが銀座の持っている先進性であり、現在も街を色褪せない強みではないかと思います。

銀座はこの2つのフィルターの両輪でまちを活性化する暗黙のルールをつくっているように思われます。これはすばらしいことではないでしょうか。

銀座らしさとは？

ここで、さらに具体的に現在の銀座らしさって何だろうということを考えてみたいと思います。銀座らしさを具体的に問われると、あれこれと出てくるとは思うのですが、そのうちのいくつかと絞っていくと、どうも銀座の全体像が見えてこなくなる。

すぐおわかりと思いますが、これは銀座通りです（図表1、銀座通りの空撮）。銀座の象徴というとなぜ銀座通りが出てきますね。それから建物はいろいろありますが、ファッション誌やいろいろな雑誌にまず載るのは、和光の建物です（図表2、和光の夜景）。

この2つが、ある意味ではメジャーであり、銀座を考える時、おそらく皆さんもメインに考えていると思います。しかしこれだけで銀座は支えられているのかというところではありません。ただ、具体的にという、なかなか出てきません。まったく乱暴な問い方をすると、銀座通りが象徴であり、和光が銀座の顔となる建物だとすると、この2つが生き残れば銀座は銀座として成立するのでしょうか。たとえば、銀座通りと和光が残ってほかのところは全部更地になって、あとはすべて数本の超高層が建って、周辺が公園になることは可能性としてゼロではありません。それでも銀座と言えるのでしょうか？

これは極端な言い方ですし、こんなことがあり得とは思えません。銀座にとってはあり得ないことですが、銀座が銀座らしさをどこでどのように生み出しているのかということ、私たちはちゃんと知っておかないと、小規模であるが類似した発想で銀座らしさを失っていくということはあることではあります。そのへんが、今の私自身が気になることです。このことは一度、歴史のなかから読み解いて考えておいた方がよいと思っています。

銀座以外のまちとの比較でお話ししたいのですが、ご存じのように、汐留に超高層の再開発が行われました。汐留というのは、もともと武家屋敷から新橋ステーションとなり、汐留操車場になったところ。ですから再開発の敷地の単位はひとつです。その単純な土地条件のもとでは自由な発想と空間の探究ができる場所でした。そのときに再開発をどのようにおこなったかという、あんまり自由なので、11街区にブロック割りして、そこで個別に建物を建てている。構想力がふんだんに使える状況になったときに、どうも人間はよりどころを求めたがる。そうでないと発想が生まれません。そんなことを汐留の再開発の経緯を見ていて感じます。

一方銀座は江戸時代に町人地であり、それぞれの敷地にいろんな歴史の層が敷地の規模など新築する建物に条件をつけています。汐留と置かれている状況がまったく違うのです。しかし、銀座のひとつひとつの土地は、その歴史的条件をうまく使いこなすと、大変だけれども銀座全体と符合した魅力的な空間を生みだしていくことができる。銀座は、煉瓦街のときも、その後の関東大震災で焼け野原になった銀座の復興も、そういう歴史とうまく付き合い、組み立てながらまちの魅力をひきあげてきたのです。その試みを次に見ていきたいと思っています。



銀座：3つのキーワード

銀座の歴史を話すうえで、江戸時代からえんえんと話してしまうと長くなりすぎます。そこで、今日は3つのキーワードを用意してきました。このキーワードは先週の土曜日、大学生を前にして銀座の歴史を20分で話してくれと言われたときに、出したことばです。銀座の歴史は20分では話せないし、今の大学生の方たちは銀座のことをほとんど知らない。ですから、3つのキーワードをもとに話すことにしました。それは、比較的取っ付きやすい言葉、「ヒューマン・スケール」「路地」「ショーウィンドウ」です。

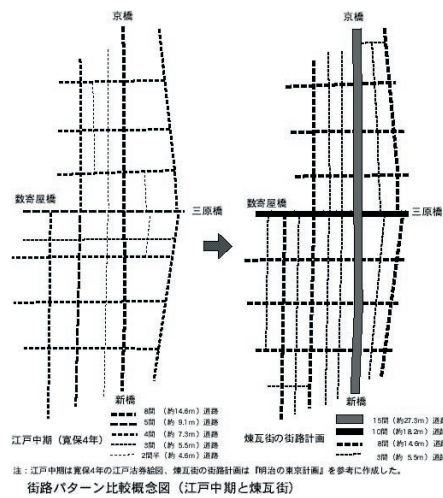
これらの言葉が本当に銀座らしさを表現しているのかと思われるかもしれません。そのなかで、ショーウィンドウは銀座らしいかなと、みなさんに思っただけのものではないでしょうか。いろいろな店が連続的に建ち、ショーウィンドウが並ぶさまは銀座としてかなり魅力的と思われるでしょう。2番目の「路地」は、一般的に考えると、銀座のイメージでどうして路地なんだ、と思われがちです。銀座通りを歩いている、路地を想像させる雰囲気はありません。また路地というとどうしても、落語の熊さん八つあんの長屋裏を思い浮かべます。実はそういう路地ではなく、煉瓦街建設の時にできた由緒正しき路地が銀座にはあるのです。

さらに「ヒューマン・スケール」というのは、ぴんどこないかもしれません。ただ、銀座は歩いて気持ちのいい、楽しいまちです。なぜ、単純なグリッドで区切られている銀座のまちが歩いて楽しいのか。銀ブラということばも明治の終わり頃から出てきて、昭和のはじめには流行語になっています。こういう単純そうに見える空間がなぜ歩いて楽しいまちなのかというのは、しばらくの間私の疑問でした。

しかし、銀座の街の歴史を考えていくと、銀座が持っている空間のスケールと、われわれが体内に持っている身体のリズム、歩いて感じる感覚が、どうも合っているのではないかと思いはじめました。これは江戸のまち構造をわかりはじめてやっと気がついたことです。研究を始めて6年間くらいは、銀座といえば明治煉瓦街以降であって、それが銀座だと思っていました。またそれが通説となっていると思います。ただ、煉瓦街以降、まちが繁栄している様子をいくら分析しても、なぜ歩いて楽しいのかはわかりませんでした。煉瓦街の時代から、江戸の歴史を調べて初めて、なるほどと思うようになりました。



3 寛永期の銀座



4 江戸末期と煉瓦街建設直後の銀座の道路網比較

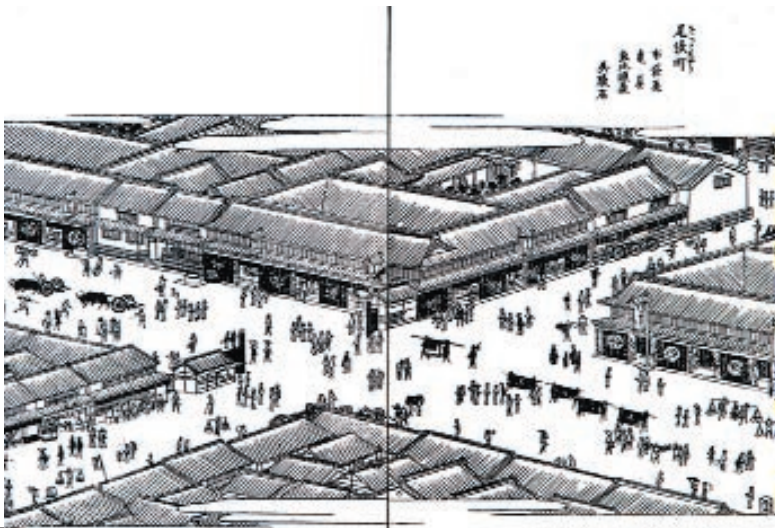
町人地であった銀座の街区は今に生きている

1603年以降に天下普請が行われて、江戸の下町と山の手のまちづくりがなされました。銀座もそのときにまちづくりされました。寛永期の復元図をよく見ていただくと、銀座通りがあり並木通りがあって、銀座通りと直角に7つの通りがあります。その間に街区がつくられています(図表3、寛永期の銀座)。街区の一边の長さは60間。京間なので120メートル×120メートルです。これは丸ビルの街区と同じです。ただ、丸ビルが育った武家地の環境と、町人地であった銀座とはまったく違います。丸ビルは武家地ですから、あの広大な街区ひとつを、ひとりの大名がかかえていました。銀座はそうではありません。ひとつの街区はいくつもの敷地に分かれ、何百人という人々が住み、生活していました。ですから、この街区のなかにはさまざまな生活がありました。現在も、住む人こそ少なくなりましたが、さまざまな店が独自の歴史をひとつひとつの土地の上で刻み続けています。ここが今も昔も変わらないところです。それと同時に銀座のそれぞれの街区のあいだの、昔は横丁と呼ばれていた通りは、400年来変わっていません。晴海通りは、和光のある方向に拡幅されてひろがっているため4丁目の街区は短く見えますが、全体の位置関係は変わっていません。

このように、銀座の街区は400年ずっと生き続けながら、まちを更新してきているのです。ここが同じ町人地であった日本橋や京橋など震災復興で大々的に区画整理をして変化してしまった街とはぜんぜん違うところです。400年の力をもって、銀座が生き抜いているというのは、ほんとうにすばらしいことだと思います。400年をかかえているから古いのかというと、銀座はいつも新しい雰囲気を創造している。構造的には古いがそこに新しい感覚を入れ続けていく。ここに銀座の強みがあるのかな、と思います。

さまざまな性格の道のネットワーク

銀座のおもしろさのもうひとつは、いろいろな性格をもった道でネットワークされていることです。銀座通りがあります。晴海通りがあります。それから並木通りがあり、江戸時代には新道といわれた裏通りがあります。ですからこの間というのは、120メートル×40メートルのひとつのブロックをつくっている(図表4、江戸末期と煉瓦街建設後の銀座の道路網比較)。さらにこの裏通りは路地と密接にかかわり、軸となる通りと毛細管のような路地を結びつけることで、道のネットワークを多彩で、柔軟な構成にしている。現在、裏通りが寂れているのは、街の構造と道のネットワーク



5 尾張町

の魅力が無視した建築が高度成長以降あまりにも多く建てられたことによると思います。逆に、三原小路のある裏通りなど、路地が生き生きしている場所は今でも魅力的です。

裏通りは銀座の道のネットワークを支えてきたと同時に、もうひとつ重要視する理由があります。1657年に江戸では振り袖火事といわれる大火があり、江戸中が焼けました。大火ののち、江戸では人口増加に対応して都市計画をして大規模に都市を再生していきます。そのときに銀座では金春通りなどを新道としてつくっていくのです。ですから金春通りには300年以上の歴史があることとなります。この裏通りは、すごい道だと私は思っているのです。1657年からえんえんと状況にあわせてつくり続けるのですが、煉瓦街ができる1870年までの200年のあいだに同じ思想や姿勢で街の骨格をつくってきた考え方があるからです。西欧の街並みを想起させる街並みをつくるというその時に、この裏通りを完成させるのが煉瓦街です。裏通りには江戸と近代の共通のまちづくり理念が宿っているのです。ですから、スペインで何百年もかけて、建築家のガウディによる同じ思想で教会をつくっている。大げさにいえばそのガウディに匹敵する思想でこの裏通りはつくられたのです。銀座以外に、こういう長い思いをえんえんとつづけてきている街はないと思います。

ヒューマン・スケールな街区の構成

先ほど、1つの街区に丸ビルがひとつ入りますという話をしました。そして銀座は町人地だったので、その中に何百人もが住んでいるとも言いました。町人地というのは、通りにむかってブロックを構成しています。江戸時代はこのブロックがひとつのまちなのではなく、通りに対しての両側まちでした。銀座通りに面してまちがあり、裏通りに面してまちがある。これは今でも生きているような気がします。近代になって、こういう雰囲気を味合わせてくれるまちはあまりないです。たいがい、通りで町名が区切られていて、通りの幅が広くなればなるほど、通りの向かい側はまったく違うまちか、あるいは違う丁目になってしまい、一体感がぜんぜんない。銀座はこういう両側町の考えを大事にして、通りごとにそれぞれの顔をつくっています。ですから1丁目と6丁目はそれぞれ違う顔をしています。

余談ですが、江戸名所図絵のなかで、この通りが銀座通りだとすると、この通りはいったいどの通りかおわかりですか（図表5、尾張町）。この通りは、晴海通りでもみゆき通りでもありません。みゆき通りの裏に、江戸時代につくられた道があったので



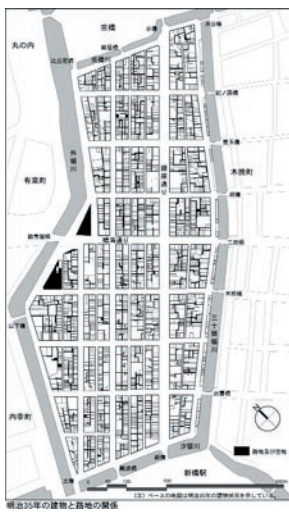
6 越後屋

す。江戸から明治煉瓦街になって、唯一消えてしまった道です。みゆき通りは山下橋につながっています。ですから銀座通りの尾張町あたりとみゆき通りは江戸時代いちばんにぎわいのあったところ。銀座通りの裏の金春新道をつくるのと同じ雰囲気、みゆき通りの裏に元禄時代以降つくっています。そういう道ができるとうい効果があるかと言いますと、裏に通りがないと表店の裏がぜんぶ長屋になってしまいます。商業の活性化、商店数を増やすという意味では裏に通りがあったほうが、お店の数が増えます。江戸時代のみゆき通りには、裏にも通りがあったので、二重の商業集積があったと言えます。それほど活力があったのがみゆき通りです。

先ほど申し上げた空間のリズムということであると、60間の街区のなかに、標準的には10メートルの幅で町屋敷という敷地による空間単位をつくりました。江戸の中期から後期にかけて、大店になると倍になったり3倍になったりします。銀座5丁目にある江戸時代にならした豪商のところ、江戸になって新聞社になるその土地はだいたい30メートルくらいです。銀座はそのなかに町屋敷規模のひとつの単位が生まれます。ですから10メートル、20メートル、30メートルというスパンの敷地と、その中のだいたい4～5メートル位の町家の組み合わせで通り沿いの空間をつくりだしています。

この写真は昭和初期の越後屋さんのビルです（図表6、越後屋）。この建物の幅がだいたい10メートルで、町屋敷の幅です。越後屋さんができる以前はこの土地は敷地が半分に割れていました。その前はもともと10メートル×40メートルの標準的な町屋敷サイズあったのですが、明治になって町家の間口サイズに割れる。それから関東大震災で江戸のスケールが復活します。銀座の敷地も時代によって変化するのですが、戦前までは町屋敷と町家のサイズが基本になった敷地の分割や統合でした。その隣に細かい、間口5メートルくらいの、これは敷地のサイズに合わせたのではなくて、建物のサイズに合わせて成立している。こういうふうに考えていきますと、江戸の幅とか空間のサイズをずっと継承していることがわかんと思います。銀座はこの空間サイズの上に新しい魅力的な建物をつくりだしている。ですから現在の銀座通りを歩いても、江戸時代の人たちが歩いたのと同じ感覚やリズムで歩けるのです。建物の空間は近代的ですが、身体を感じている空間のリズムやイメージは、歩いて心地よい、疲れない。そういうスケール感というのは400年もえんえんと保ち続け、それを新しくリニューアルしている。

ですからすごく新しいのに、からだになじむような気持ちよさがある。たとえば斬



7 明治中期の路地網
8.9 銀座通りと南北の路地



新たな新鋭のアーティストの作品をみると慣れずに疲れることがありますが、銀座では新しいものを見ても疲れな。昔から感じている心地よさがベースにある。それが銀座の魅力のひとつであると思います。

歴史に生きる路地

2番目のキーワードは「路地」です。路地の効用のひとつは、先ほど言いましたように、表通りと横丁、裏通りを多様に結ぶ機能をもっていることです。60間(=120メートル)×20間(=40メートル)のブロックの中を毛細管のように縫っていく(図表7、明治中期の路地網)。それが銀座の路地の魅力です。

路地は煉瓦の街並みと、実は双子のきょうだいなのです。銀座通りに煉瓦街がつくられたときに、煉瓦街の裏に一本、路地を通しました。煉瓦街と同時に路地がつくられたわけです。ですから江戸時代の路地のように、通りにむかって直角に長屋に入っていく路地ではないのです。路地という江戸時代の感覚なり通りの意味を近代という先進性で作りかえたのが、銀座の路地の魅力です。銀座の路地というのは、ほかのまちの路地とぜんぜん違うのです。それが今でもしっかり生きています。生きていと言いましても、今はほとんど誰も使っていません(図表8、9、銀座通りと南北の路地)。よく銀座の歴史をご存じの方たちが、ここの大事さをよく理解されていますが、普通のかたは、ビルができた裏と裏のすきまだろう、ぐらいにお思いだと思います。実は煉瓦街が華やかにつくられたときに、中の生活空間、何百人という人たちの生活を支え、それが130年たった今でも銀座の都市構造の一部をしっかりと支えている。これは銀座の人たちは有効に使わない手はないと言いたいです。

ほんとにここは裏ですけれども、銀座が煉瓦街を大事にするということは、この空間をどういうふうに再活用するか、ということだと思ふからです。できたのが同じだということも含めて、まちの内部を支える厚みの構造がそこにあると私は考えています。

銀座は戦時中、東京大空襲で焼けてしまいました。ご存じの方もおられると思いますが、7～8丁目は焼けずにのこった場所です。ですから戦前の銀座の雰囲気、当時はこんなだったかもしれないという空気を今でも感じさせてくれます。このあたりには、今でもたくさんの路地が生き生きと生きています。そういう空間は古くさい、という方もいるでしょう。ただ、煉瓦街のときに空間を新しく斬新につくりかえようとしたときの、ひとつの要素として路地があったということは、少なくとも理解したう



10 路地をつなぐ自動ドア



11 ビルの中の路地

えで、路地をどうしようか、街区をどうしようかと考えてほしいと思います。

ザ・ギンザ裏側の、豊岩稲荷に入っていくところからのこの路地を、歩いたことのない方はぜひ一度歩いてみてください。途中に24時間の自動ドアがあります（図表10、路地をつなぐ自動ドア）。銀座グリーンビルができるときに、銀座の方々がこの路地の大切さを訴えて、通れるようにしたものです。この路地が閉鎖されずにのこったということに、銀座の底力を感じます。

銀座の路地は、いろいろな使い方がされています。銀座にはビルのなかにも路地が多いのです。これはコマツ・アネックスですが、こういうビルを通過して向こう側に行くのがとても便利です（図表11、ビルの中の路地）。ですから、ビルの外の、明治の煉瓦街からの古い路地もあれば、ビルの中の新しい路地もあるのです。戦前にできた路地が、ビルの建てかえのときに、路地の機能をそのままのこして、新しく建てられたビルも銀座には多く見受けられます。南北に細長いブロックですから、隙き間なくビルを建てていくと、目的地に行くのに回り道をしなくてはなりません。これは必要に迫られてつくったのかもしれませんが、路地の利便性が優先された結果であるように思います。それほど、銀座の路地は現在においても街をネットワークする重要な要素であります。

煉瓦街が生み出したショーウィンドウ

3つめのキーワードは「ショーウィンドウ」です。銀座のにぎわいをつくるという意味では非常に重要な空間です。ショーウィンドウも銀座らしさを象徴する上でたいへんに意味があります。煉瓦街は官がつくった空間です。煉瓦街ができたときに列柱が連続して並びました。これは官が威厳をもった空間にしようとしたわけです。それは連続的な街並みをつくりだしました（図表12、建設当初の煉瓦街）。しかし、その5年か10年後には、銀座の人たちは列柱を生かしながらショーウィンドウをつくってしまう。これも銀座の底力だと思います。ただ、列柱がだめだからつぶすというのではなくて、ショーウィンドウとして魅力的な空間につくりかえてしまう（図表13、列柱がショーウィンドウ化した煉瓦建築）。これが銀座の人たちのしたたかでエネルギーシユなところだと思います。しかも明治の早い時期にまちを連続的に彩る空間をつくりだしてしまった。官の煉瓦街というベースと、銀座の人たちの先進性の両方がなければ到底実現しなかったことが起きたということが、銀座のショーウィンドウの出発点だと思っています。このことがあるからこそ、今でも銀座のショーウィンドウはほ



12 建設当初の
煉瓦街

13 列柱が
ショーウィンド
ウ化した煉瓦建



かのまちと違って、歴史を背負ってがんばっている充実感を感じます。さらに、銀座のショーウィンドウというのは、建物の大きさに関係なく、まちに別のリズムを与えています。これは重要なことだと思います。さきほどからの歴史の背景をふまえた構造のなかに銀座のショーウィンドウもあり、みなさん楽しみながら歩ける空間演出となっています。銀座のショーウィンドウは個々の商店を超えたまちとしての魅力があるのです。

そろそろ時間もせまってまいりましたので、震災復興以降のモダン銀座については、あとで時間があったらお話したいと思います。私の話はこれで終わります。

●シンポジウム「銀座の街並みを考える」

竹沢 では、第2部のシンポジウムに入りたいと思います。コーディネーターをお願いしているのは、法政大学教授の陣内秀信先生です。では、陣内先生、よろしく願います。

陣内 今日はこんなに大勢のみなさん、とくに銀座で実際にお仕事をされ活動されている方々にお集まりいただきましてありがとうございます。私たちは、今日のこの会をオーガナイズしている竹沢さんと一緒に、10年以上前から銀座に拠点を置き、学際的なさまざまな研究や調査をしてきたことがきっかけとなって、銀座のみなさん、銀座通連合会の方々、大勢の方々とお知り合いになり、銀座について教えていただきました。アドバイザー・グループとしてもお手伝いさせていただいております。そのなかから岡本さんの奥深いそしてひろがりのある銀座研究も生まれてきたのです。そういう蓄積の上に、今日のシンポジウムも企画されています。今までも何回か発表会や討論会を行ってきています。ただ、こんなに大勢お集まりいただいて、大きな視野で銀座を論ずるといのは初めての試みで、これからの大きなステップとなると期待しております。

銀座というのは非常に可能性があり魅力がある、世界に発信できる、日本のなかの代表的な商業的なまちです。東京はいま激動しつつあり、汐留ができ丸の内が再開発され、日本橋からも大きな開発の波が押し寄せています。そういう中で銀座はこれからどう考えたらいいのでしょうか。夢のあるヴィジョンもいろいろと提案されております。国土交通省に働きかけて、ただ単に街路を改修するのではなく、豊かな歩行者空間を実現するとか、もっと大がかりにいろんな魅力をつくっていくヴィジョンも提示されています。

そういうなかで今日は、第一ラウンドとして、銀座の街並みの魅力を中心に、今後どんなまちづくりをしていけばいいかということ語り合いたいと思います。つっこんだシビアな議論は2回目の「都市再生法と銀座」で出てくると思いますが、今日は、銀座がどんな魅力的なまちなのかということ、特に中心にお話いただければと思います。



ではまず建築史の側からの銀座研究のパイオニアであり第一人者である初田亨先生からお話いただきます。

銀座は、銀座のまちの人たちがつくってきた

初田 工学院大学の初田です。今日はこんなに大勢いらしていただいて、ほんとうにすごいなと思っています。銀座に思い入れの強い人たちが銀座にはたくさんいるんだなということが、素直な感想です。

歴史的に見ていっても、銀座はつねにそういう関係にありました。いつの時代でも、まちをどういうふうにつくっていくかという思い入れの強い人たちがたくさんいたのです。今日おくばりした資料（巻末）をごらんいただくと、左上2つは銀座煉瓦街がつけられた頃の写真です。列柱が並んでアーケードがあって洋風の街並みができました。これはこれで好ましいことであつたとは思いますが、いろいろな文献を調べてみますと、銀座煉瓦街がつけられた直後くらいは、銀座のまちにはあまり人気がなかったようです。入る人も敬遠していたようで、調べてみると非常に空き家が多かつたのです。空き家が多かつたまちがいつごろ少しずつにぎわいを獲得していったかという、明治10年くらいに銀座煉瓦街が完成してから10年後くらい、明治中頃からにぎわいはじめ、明治後半にはにぎわいがたかまっています。いつの段階で日本橋を中心にした界隈を追い抜いたかはわからないのですが、明治の終わりくらいから銀座はかなりにぎわいはじめました。たぶん大正時代に日本橋を追い越す繁華街まで成長していったのではないかと思います。

そのとき重要なことのひとつは、日本橋のほうと銀座のほうの違いはどこにあるかという点です。銀座は商店街なんです。もちろん日本橋も商店街ですが、日本橋は主に、自分の家が問屋であることを誇りに思っていたようです。明治10年代の後半に、数多くの銅版画がつくられております。その一例が資料右側の2つです。当時の銅版画に店をのせるには、お金を払っていたようです。銅版画の版元がいくらでのせませんか、と言っていたようです。お店も自分の宣伝になるからのせていたわけですから。つまりわりと積極的な人たちがのせていたのです。どういうふうな文字や絵を入れるかは自由で、あとから訂正もできるようになっていました。銅版画を調べてみますと、日本橋のほうは、問屋であることを主張している人が多いのに対して、銀座は問屋であることをあまり主張していないものが多いのです。江戸時代には日本橋は問屋が中心

ですから、江戸時代の流れを汲んだ日本橋としては、店が問屋であることに価値を見いだしていたようです。それに対して、銀座は新しい商店街をめざしていくということがうかがえると思います。実際にこの銅版画がつくられたころから、銀座はだんだんにぎわって行くわけです。先ほどの岡本さんのお話にもありましたように、アーケードがつぶされてショーウィンドウがつくられていく。さらに興味ぶかいのは、たとえば資料の一番下の写真に金春湯というのがあります。ここには和風の伝統的な唐破風がつけられています。その上の対鶴館という旅館を見ると、生け垣をつくったりしていることがわかります。純洋風につくられた煉瓦街も、払い下げが進み、人々が住むようになっていくと、住民によっていろいろと手が加えられ、親しみのもてる和風要素も加えられていきました。

明治中頃から銀座がにぎわいはじめたということをお話しましたが、そのころは銀座煉瓦街の完成直後の写真とくらべるとずいぶん感じが変わっています。それは銀座の人たちが政府がつくった煉瓦街を、自分たちで作りかえていったからです。親しみの持てるまちに自分たちで作りかえていき、結果的にそのころから、銀座がにぎわいをもち出して行くのです。このように、銀座では最初のころから、自分たちでまちをつくっていくことに積極的だったことがわかるのです。

商店街は一軒だけががんばってもだめ

今日、これだけ多くの方にいらしていただいたのも、今もそういう伝統が受け継がれているからだと思います。これからの銀座の商店街も、そういった人たちによって新しいまちがつくられていくのだと思います。銀座はひとつの建物だけで成り立っているものではありません。商店街としてつくられているまちです。商店街というのは一軒だけががんばってもだめなんです。まちとしてがんばらないとだめなのです。

明治の終わりから大正にかけて、銀ブラということばが生まれたように、銀座のまちをぶらついて楽しむ人たちがあられました。昭和になりますと、それが大衆化してより多くの人を楽しむようになりました。明治のころは文学者とか特別な人たちが楽しんでいたのですが、関東大震災後、昭和になると、ごくふつうの人々まで、時には家族連れで楽しむようになりました。銀ブラというのは、あそこに有名なお店が一軒あるから行きましょうということではなく、まちを楽しむことです。まさしくそういうまちとして銀座は大きく発展してきたし、現在もそういうまちだと思います。

これから銀座をどういうふうにしていくべきかということが現在、大きく問われて

います。建設直後の銀座煉瓦街に象徴されるように、最初は官庁でつくったかもしれないが、そこに住んでいる人たちが自分たちでもってつくりかえていったまちが銀座です。自分たちがまちをつくっていくんだという積極的な熱意をもった人たちがたくさんいたのです。おそらく現在もそうだと思いますし、それはこれからの銀座を考えるうえでとてもうれしいことです。もっともっとすばらしいまちが今後できていくことを期待します。

陣内 ありがとうございます。商店街としてのまとまりや一体感も歴史のなかで培われてきたことであり、現在も続いている、というお話がありました。私はヨーロッパの都市を研究して同時に東京も見ているのですが、日本のまちの最も魅力であり特徴のひとつは、「商店街」です。そしてその代表が銀座であると言えます。たとえばパリにしてもミラノにしても、商店街というよりは、ビルの1階にテナントとして商店が入っているんですね。ですから主役はどちらかというと、ビルのオーナーであって、店主、商売をやっている方々ではないのではないかと思います。

日本の商店街は道をはさんだ両側に町屋がならんでお店があって、そこがコミュニティになっている。生活の場であり商いをやって、そこから培われた責任あるまちづくりの主役の方々がいる。初田さんのお話を聞いて、そういうスピリットがずっと生きているのが銀座ではないかということを感じました。

では、実際に銀座で商売をされ、銀座まちづくりをひっばっているおひとりである小坂さんをお願いしたいと思います。

年月をかけてつくりあげてきた銀座の誇り

小坂 私よりも銀座について詳しい方が大勢いらっしゃるなかでお話しするのはちょっと心苦しいのですが、私の日頃考えていることをお話ししたいと思います。

まちづくりをいろいろ見てみるとどうしてもハードの面からとらえていく面が多いように感じます。外観的なものからものごとを考えていく傾向が多いようです。初田先生のお話にもありましたように、銀座には昔、煉瓦街があって、これはハードから入っていったものです。ところがそれがほんとうにうまく活用できるようになったのは10年くらいたってからのことです。中身がしっかりしてきて、ようやく使い物になったと言えます。ですから、まちづくりを考えるときに、大事なの中身ではないかと私は考えています。

では、銀座の中身とは何なのか。これは先ほどからの先生方のお話にありましたように、長い年月をかけて築き上げてきたものではないかと思います。銀座は商人たちがいろいろ考えて提案してつくってきたまちです。それがほんとうに銀座らしさとして決まっていくのは、銀座に来られる来街者が何を選ぶかということにかかっていると思います。店側はいろんな提案をしていく。それを選んでいくのは、まちに来るお客様です。それが岡本先生のおっしゃっている銀座フィルターではないかと思うのです。

一例で言いますと、数年前7丁目に吉本興業さんが出てこられました。最初は華々しく展開されて、銀座に見慣れないような十代の女の子たちがやってきました。それがいつのまにか消えてしまいました。そのときこれは銀座フィルターにかかったんだな、という実感を持ちました。

大事なことは、銀座の人たちが提案しても、えらぶのは来街者の方だということで、では今まで選ばれた銀座の特徴は何かと言いますと、ちょっと大人っぽい雰囲気、ひとあじ違う店の内容、努力と言っていていいと思います。ものを売るということから一歩ふみこんだ、その店の価値観。ほかではない専門性があるということではないかと思えます。

また、銀座の人の特徴は、銀座の特徴ということについて、ものすごい誇りを持っているということです。銀座を愛しているということかもしれません。それを守るためには、何でもする。それが粋というか、見栄とも言えますが、それも魅力になっていると思います。特に店の利益にならなくても、何か銀座らしいことができるのであればやってみようじゃないか、という気質があります。また、まちに来られる方たちもそういう銀座の人の誇りを感じ取っていて、それがまた銀座らしさになっているわけです。このヒューマン・インタラクションが岡本先生のおっしゃる「ヒューマン・スケール」とも実は関連しているような気がします。

伝統をふまえ、どんどん新しい提案を

もうひとつ、最近では国際化社会と言われます。しかし考えてみれば銀座は歴史的に国際的なミックスできています。今日も菊水さんがおいでになっていらっしゃいますが、銀座で日本における輸入たばこの1号店があるわけですし、日本に初めて輸入されて情報発信されるというのは明治以来銀座から、という伝統があります。だからそのなかで日本の伝統も極めている。和の文房具店にしてもこれほどきちっとしている

店はない、という店が銀座にはあるわけです。ですから銀座の特徴というのは、国籍を問わない。最近増えてきた国際ブランド店も、その特徴を感じ取って店に取り込んでいる気がします。

世の中がダイナミックであると同時に、銀座の特徴も不変ではありません。銀座の提案も日々新しいものが生まれてきます。来街者の方たちも生活様式が変わり、好みも変わり、その選択も変わってきています。しかしいくら変わっても銀座という地名は変わりません。そういう意味では銀座の特徴の軸、心棒は変わらないのです。大人の雰囲気とか、銀座の誇り、粋なところは変わらないのです。新しい絵が描かれても、必ず以前のいいところの残像は、絵の中に生きています。

われわれの先輩たちも非常に勇気を持って新しい提案をしてきました。それこそ、明治時代・大正時代と必ずしも新しいことを提案していくことがそんなに楽だったわけではないと思います。でもそこでがんばって、提案してきたわけですから、今の世代も次の世代も、どんどん新しいことを考えていっていいと思います。ただそのときに、軸である大事な部分、心棒は忘れないようにしていきたいと思います。

まちづくりのハードな部分は先に出るものではなくて、ソフトを支える部分としてハードがある。建物、道路、街並みは、全体的に心地よい空間として来街者の目につくものであること。銀座に期待している方たちを裏切らないハードであってほしいと思います。

陣内 ありがとうございます。私が学生時代、建築家の大谷幸夫先生から聞いて記憶にのこっている言い方があります。器（ハード）と、機能とか営み（ソフト）といった中身、それをにない、つくっていく人や組織といった主体。その3つの関係がうまくいくと、非常に活気があって魅力があつていいまちができるだろう、と。このことを私は大谷さんから学びました。まさに銀座におけるその3つの関係、チャレンジングでかつ伝統的な軸をキープしながら常に提案し、時代にこたえながらまちをつくってきたという、そういうスピリットのお話をいただいたと思います。

では続きまして、岡本さんに、先ほど言い足りなかったこと、おふたりのお話を聞いた後で感じることを、お願いします。

銀座に点在する近代建築

岡本 先ほど言い足りなかったことを話させていただきます。関東大震災以降、モダ

ン都市銀座としてどうして魅力的になったかということなのですが、銀座は丸の内のように、近代建築が連続的に建っているわけではありません。木造の建物があったり近代建築があったり、ある一郭は多少大きかったり、ある一郭は小さかったりする。銀座の近代建築は、絶妙なバランスで銀座に分布しているということに気づきます。壊された交詢社とか、7丁目のライオンビル、4丁目の和光、というように、近代建築は分散しながら銀座全体を魅力的にしています。それはどういうことかということ、銀座の歴史が作りだしてきた敷地や路地が作りだすまちの構造に対応したかたちで近代建築が建てられるのです。ですから、新しいものが入ることでまちがすごく活性化されて魅力的になると同時に、歴史的な構造が維持されてまちの重厚さやヒューマンな身体感覚を失うことがなかったのです。まちの再生にも伝統と新しさがうまく共存しています。

陣内 確かに銀座では、失われた建物を含めて考えると、4丁目の和光からはじまって、銀座通りを飾る華やかな建築もあるけれども同時に、脇道、横道、縦道にも、まんべんなくいい建物がありますね。いい建物、結局それはいい中身があるということですね。魅力的な商品を発信する場があるということです。銀座8丁で、長さも幅もすごく大きい。こんなに商業的エリアが広いまちは世界的にもめずらしいと思いますが、そのなかに的確にシンボリックな建物がある、というお話だったと思います。

それはやはり、基調講演であったように、まずは江戸時代の町人地というエリアのなかで営みがひろがって、しかもそこに煉瓦街がつくられ、それを銀座の人たちが自分たちのものにしていった、活発な商いの場所にしていったという、その集積が今にあるのだろうという気がします。

小坂さんのお話のなかに、銀座には心棒があって変わらない良さをキープしながら新しい時代に取りこんできたとのことですが、この間、東京がめまぐるしく変わってきたわけですが、ある時期、日本のまちづくりの主役は若者とか女性に光があたって、原宿や青山、代官山というところが非常に話題になり、銀座がどちらかというところとちょっとかすみがちに見えたこともあったかもしれないのですが、その後急速に銀座が力を取り戻して話題になりました。現在、外国資本も銀座をターゲットに入ってきて、銀座の魅力がこの間また復活してきたように思えます。それはやはり日本が成熟社会に入り、ほんもの志向が強くなる、という傾向が出てきている。そこで銀座が培った底力が評価されている。そういう時代ではないかと思います。私は東京の調査を25年

くらいやってきたのですが、そのなかでそのように感じる次第です。

3つのキーワードをどうとらえるか

これでひととおり3人の方からお話をうかがったのですが、第2ラウンドのテーマとして、岡本さんが銀座の特徴として「ヒューマン・スケール」「路地」「ショーウィンドウ」の3つキーワードを挙げてくださいました。今、銀座のまちが大きく動こうとしている。あるいは小坂さんのお話にあったように、現在のジェネレーションの方々が新しい提案をしていい時期に来ている。外国資本も含めて外から、銀座を開発しようというパワーも出てきています。ですが、銀座の内部から変えていこうというエネルギーもいま出つつある。そういう中で具体的にはどういう方向をめざしたらいいのか。どういうビジョンを描いたらいいのか。これは簡単には出ないのですが、ことあるたびに、内部の方のディスカッション、銀座が大好きで来街される人たち、いろんな立場があると思いますが、議論を急速に深めていく必要があるのではないかと思います。

そこで今日提起していただいた3つのキーワードを、どうお考えになるかをお聞きしてみたいのですが。

まず、「ヒューマン・スケール」と岡本さんが言った中に、江戸時代の町人地と町屋敷ということばが出てきました。日本のまちづくりにとっては土地＝敷地というのが非常に重要です。土地を所有している方々がどのように建物をつくり、商売をしていくか、どんなプログラムを考えて活動をしていくか、その土地＝敷地のスケールというのが非常に重要で、その土地の単位が町屋敷になり、そのなかに複数の町屋が建っていくわけです。それがだいたい、もともと10メートルくらいの幅で奥行きが40メートル。それが今の銀座の基礎になっているということですね。

ところで、デパートが入っているところは、大きいわけですけど、あれはどうして大きいのですか？ それはあとでお聞きすることにしましょう。銀座にはいろいろな間口の建物がありますが、基本的にはパリのシャンゼリゼとかミラノのモンテ・ナポレオーネなどと比べて、間口は小さいですね。これは銀座の面白さであり魅力であり、底力、キャラクターなんです。岡本さんがおっしゃっているのはこういうことですね。そういう銀座の持っている特徴が、実は歴史的な背景があっただけでこうなっているということ、それが個性となっている、ここがポイントだと思います。

「路地」ということで、われわれはすぐ江戸時代の表店、裏店を思い浮かべます。



しかし銀座の路地の特徴は、実は洋風な銀座煉瓦街を明治の初めにつくった段階で、敷地の背後をつないでいく、街区の内側をつなげていく路地、これができたことなんですね。これは非常に面白いことだなと思います。日本のほかのまちにはありません。文明開化が生んだ路地というのはなかなか面白いキャッチフレーズになると思います。それが江戸時代的なものとリンクして、ネットワーク化されているのが銀座ということなんですね。ただ、ビルが巨大になったり空調室外機が出てきてうっとうしくなったりして、有効に使われていないということですね。

3つめの「ショーウィンドウ」ですが、銀座ではショーウィンドウを見直そうということで、学生コンペティションが行われたりしており、まちづくりのキーワードのひとつとなりつつあります。去年は日本ディスプレイ協会が主催した銀座のショーウィンドウをめぐるシンポジウムもあって、私も参加させていただいてたいへん面白かったのですが、そこでは銀座のショーウィンドウというのは、世界に発信できる非常にクリエイティブでコンセプチュアルな内容を持っているということが浮き彫りになりました。

この3つのキーワードについて、もう少し話したいのですが、その前にまず岡本さん、なんでデパートの敷地は大きいのですか？

それぞれの敷地には歴史がある

岡本 今のようにあれだけ大きくなったのは1960年代です。戦前までのデパートというのは、もともとは保険会社の所有していた建物を間借りして入っていました。近代建築というのはだいたい、江戸時代の大店が建物を構えるくらいのスペース、つまり10メートル×3、間口30メートルくらいのスペースに近代建築が建ち、そこにデパートが入ってくる。これは戦前までは、一般的な銀座のルールにのっとって成立しています。戦後、そして1960年代には、それをこえたいろいろなことが起こりました。まず、戦後、大規模土地所有者の人たちの土地が細分化され、一部は細分化せず企業が所有するようになります。かつての大規模土地所有者が持っていた土地が、基本的に今のデパートの拡大につながっています。大規模土地所有者は吉田嘉平という人ですが、デパートの東急や松屋が拡大していったのは、たいがい吉田嘉平の土地をもっていて、そういう偶然があるのです。そういった背景があってデパートがブロックを占めるほど拡大をしていきます。

それからもうひとつこと添えたいのですが、銀座の路地というのは、まだまだこれか

ら魅力的にできると思うのです。きらびやかな表の空間と同時に、歴史的にも重要な路地にも多くの方が目を向けてもらいたいと思っています。

陣内 ひとつの土地、敷地に歴史があり来歴があって今の大きさになっているということがよくわかりました。銀座というのは多少大きい土地があり小さい土地もあり、それがいっぱい集まっているそのバラエティが銀座の魅力かと感じます。

初田さん、いかがですか？

江戸をひきずった、銀座の「ショーウィンドウ」

初田 「ショーウィンドウ」についていろいろと調べたことがあるのですが、銀座の場合は、煉瓦街のアーケードの部分に増築していったのです。明治10年代後半の銅版画を見ている限りでは、アーケードにかなりショーウィンドウがつけられています。あたりまえといえばあたりまえですが、当時はショーウィンドウということばはなく、資料には「床店」と書いてある記録があります。銅版画を見ると、あきらかにガラス窓がついたショーウィンドウです。床店とは何かというと、もうお気づきの方もいらっしゃると思いますが、江戸時代のお店は、商品は店の奥の方や蔵など、火事になっても燃えない場所にしまってありました。それがだんだん、大火を克服できるようになり、商品を陳列して販売することが可能になってきました。まちのなかを多くの人が歩くようになってくると、商店も不特定多数の人たちをお客として相手とするようになってきます。それまでの商店は得意の客だけを相手にすればよかったのですが、不特定多数を相手にするようになったのです。特に銀座など、東京でも中心の商店街では、銀座のまちに住んでいる人もいいお客だったわけですが、さらに広域的な範囲のお客さんを対象とするようになっていきました。いち早くショーウィンドウもつけられていったのです。そのなかで、床店ということばが使われていく。床店というのは、江戸時代のお店で、すべての商品を並べて売っていた小さな店舗です。縁日で売っているような雰囲気を思い浮かべればよろしいわけです。当時は商品を陳列して販売しているお店はあまりいい商品を持たないお店と言われておりました。ところが、そんな形式が銀座煉瓦街のショーウィンドウとして受け継がれている。価値観は変わっていても、ショーウィンドウの意味合いは近代に受け継がれている。日本の商店街というのは、近代になって大きく発展するわけですがけれども、江戸的なものをしょいながら、発展していくわけです。江戸的なものと関係ないように思えるショーウィンドウ

ウという存在にも、そういうものが見えます。

選ばれる銀座

もうひとつは、先ほど小坂さんがソフトな部分が大切だとおっしゃっていましたが、私もそう思います。今、銀座の方が特に考えなくてはならないソフトは、どういうふうな個性をつくっていくかということではないかと思うのです。昭和の初めのころ、銀座の街は一つのピークに達しています。たとえば銀座にデパートが入ってくるのは、関東大震災後の昭和になってからです。それはデパートが、選んで銀座に来たわけです。それは銀座がハイセンスな街だったから、高級品を売るということを売り物にしていたデパートにとっては非常に重要な場所でした。銀座が大きく発展していくなかで、街がデパートさえも呼び込んだのです。デパートも銀座を選んで入ってこざるを得なくなってきた。それは、それまで銀座の人たちがつくってきた大きな成果だと思います。

戦後ももちろん銀座は、ピークを保ちつつけていくわけですが、大きな違いは、戦前までは東京でピークがひとつしかなかったのです。戦後、高度成長期を経て、より大きな東京になっていくなかで繁華街、商店街もいくつかできてくるわけです。銀座だけではなく新宿、渋谷など。そうすると銀座は戦前と同じようなかたちでトップだけをめざせばいいかということではなく、ほかとの違いを鮮明に出していくことが必要になってきます。トップであることは変わりないと思います。たとえば昭和のはじめにデパートが銀座を選んできたように、現在はどこよりも多く外国のブランドショップが銀座を選んで進出しています。商店街というのは常に変わっていかなくてはいけないわけで、そういう意味からいうと、いろいろな商店が銀座という場所を選んできているということに対して、銀座の人は自信をもっているのではないかと思います。さらに言うと、デパートの人たちも昭和の初めに、自分たちも銀座を担う一員となるということで入ってきたわけです。今後外国ブランドの人たちも銀座の一員になっていくのではないかと期待しますし、そうすれば好ましいことだと思います。先のことはわかりませんが、少なくとも今の段階では、銀座を選んで入ってきたということは言えます。銀座の街というものを確認したうえで入ってきたのだから、将来的に銀座が発展していく原動力のひとつとなっていく可能性もあると思います。

ぜひとも、銀座という街の個性をより大きく育てていっていただきたいと思っています。

ますます魅力的な繁華街となるために

陣内 初田さんのご説明のなかに、しばしば商店街と繁華街ということばが出てきました。この繁華街ということばは、英語にしにくい、もちろんフランス語にもイタリア語にしにくいことばです。盛り場ということばはもっとしにくいですね。繁華街ということばは、日本の都市の大きな特徴だと思います。

銀座は文明開化以後、特に昭和初期に大きく発展しました。いろんな集積があって、ただ商店街というだけではありません。デパートがありギャラリーがあり、文化発信の基地がある。そのなかで銀座は時代にふさわしいソフトを意欲的に取り込んできました。あるいは外から入ってきた方々が銀座に根をおろして大きく発展していきました。

先ほど岡本さんが提起した3つのキーワード、ある意味ではハードと結びついたキーワードへのご意見ということもうかがおうと思ったのですが、同時に初田さんが今言われたように、新しい時代のソフトをどう考えるかということは非常に重要です。魅力的な繁華街、世界に発信できる銀座らしい繁華街を今の時代につくるとしたらどんなものがあるのか。あるいはどんなものがネガティブなのでしょう。

小坂 これからどう考えるかということですが、あまり無機質なものはよくないと思います。ヒューマン・エレメントというものが欠けてはよくない。小さいお店がいっぱいあるのも、ヒューマンという意味で価値があるんですね。そのお店の誰かと、もの売り買いの話だけではなくて、もう少しつつこんだ話ができたりわかりあえる。そういう関係があると思います。

最近、再開発がどんどんすすんで、たとえば丸の内でも無機質だった仲通りがどんどんソフト化しています。先日新東京ビルが新装して、2階を商業空間とし、中身を外に出したデザインで、これまでの三菱地所の考え方とは180度違う展開にしています。

しかし永年築き上げてきた銀座の心意気、そこにいる人たちの誇りは、一夜潰けではできないのではないかと思うのです。特に、汐留のようなところだと、全体をプランニングされているわけではないので、個々のお店がそれぞれやってもそこまで誇りをもつには、相当の年月がかかると思います。銀座の強いのはそこですから、それをこれからもっとどうやってのばしていけばいいかということにかかっていると思

ます。もっとヒューマンにしていく、路地のようなヒューマン・エレメントをどんどん強くしていくのがいいと思います。

もう一つ、銀座で大事なことは、遊び心があることです。たとえば天賞堂さんのビルの横には、天使の置物があつて、ビルの脇からちょこっとのぞいている。こういった遊び心がいいですね。銀座らしいと思います。6丁目のくのやさんは毎年大晦日の夜中に餅つきをやって、お餅をふるまう。これはもうかるわけでもなんでもないけれど、やっぱり銀座らしい、銀座の雰囲気が出る。大晦日に餅を配る、商店街の誇りです。これが大事なんだと思います。こういう要素がもっとあられるようなまちのつくりができればいいと思います。

陣内 時間もせまってまいりましたが、もし会場からご意見またはご質問があれば、受けたいと思います。いかがでしょうか？

ヒューマン・エレメントをどう生かすか

難波 陣内研究室の難波です。今のお話のなかにも、ヒューマン・エレメントの強化という話がありましたが、高度成長以前の古い写真を見ますと、三十間堀の川が流れていてそこに水上バスの走る風景がうつっています。ヒューマン・スケールで身体リズムということでは、かつてはすぐれたものがあつたのではないかなあと想像します。それを今日のパネラーの皆さんはどう評価されるのでしょうか。また、路地を十分に生かすということもそうですが、失われた河川に匹敵するようなヒューマン・エレメントが探っていくこともひとつの方法ではないかと思うのですが、いかがでしょうか？

陣内 ありがとうございます。どうしても現代は建物の中を魅力的にして、そういう建物が連なって都市ができてしまうという方向に動きがちで、外部空間やまちの中の場所を快適に楽しくするという方向がなかなか生まれてきません。特に犠牲になってしまったのが、銀座にとっては堀割、水面だったかもしれませぬ。それから路地も、もっとかつては二階建ての建物がまわりにある時代でしたら、気持ちよくゆとりを持って中を通れたはずです。だんだん都市のなかにゆとりがなくなって、高層ビルが建って、その谷間になってしまう。街路、路地、水面、小広場のようなものがなかなかつけれない。そういうなかでどうしたら、そういったセンスで魅力を取り戻せるか

ということではないかと思うのですが、いかがですか？

初田 私は銀座というのはすごいなと思うのですが、ひとつだけ失敗したことがあると実は思っています・それは堀割をぜんぶ埋めて、その上にビルを建ててしまったことです。結果的にプラスになった部分もあるのですが、今おもえば惜しい財産をぜんぶなくしてしまったな、と思います。ただ、そんなことをいってもしょうがないので、これからどうするかということが大切です。外部空間をどのようにするかということで、緑のある小さなポケットパークをいくつかつくってみるのもどうかと思っています。

今日、実は銀座の地下鉄を出てここまで歩いてきて、時間があつたのもう一回外に出て歩いてから戻ってきたのですが、非常にショーウィンドウがきれいになってきたように思いました。ある意味で建物内部に外部空間にかわるものを積極的に取り込んでおられるお店もありました。そういうことをこれからもっともっと銀座の人たちが考えていけばいいと思います。これから大きな公園をつくるなどは非常にむずかしいかもしれませんが、店のなかを積極的に外部に見えるようにしていくこと、あるいは外部を建物の中に取り込んだものにしていくことはできるのかなと思います。

陣内 街路も車が支配しているような状況だと、物理的には同じ広さでも、狭く感じます。人間がもっとゆっくり歩けるような状況があれば、広く感じる。銀座のみなさんのあいだでは、今質問にあつたような問題について、どうお考えでしょうか？

小坂 現実問題として堀割を戻すとかいうのは難しい問題で、実現しにくいと思います。いちばん手っ取り早いのは、建物自体にそういう要素を多くすることです。もし大型の建物を建てる場合には、路面階においてはそういう空間をもうけなければいけないとか、そのかわり容積率をボーナスするとか、そういうやりかたを考えてはどうかと思っています。インセンティブもあつてそういう空間ができるようにしていったらどうかと思っています。

初田 一時期、銀座の街並みにオフィスビルがずらっと並んだ時代があつたのですが、今日歩いていて感じたことは、外装を改装していかにも商店らしい外装になったお店がずいぶんありますね。それは好ましいことではないかと思いました。また、古い建物もいくつか銀座にあります。もしくは看板の裏側にかくれています。そういう建物

にもう一度脚光をあびせて、残された古いものを前面に押し出してくるというのも、少なくとも日本のなかの商店街では銀座にしかできないことだと思います。渋谷にはそれは絶対出来ませんし、新宿にもできない。ぜひ、古いものも大切にしていきたいと思います。

小坂 岡本先生がおっしゃったように、新しいビルをつくるときに、路地をビルに残すという考えは、これからもぜひ建て直しの時に考えてもらいたいと思います。

歴史を忘れずにいることの大切さ

岡本 質問にたいしてひとことだけ言わせてもらいます。銀座の堀割は400年、えんえんと続いてまちをつくってきました。堀割があったことを今後100年くらい忘れないでいてくれば、そのあいだにたぶんコンセンサスができて、堀割が復活するだろうと、私は信じています。

水際の魅力というのは、いま高速道路の下にはいっているお店も含めて、水際が魅力的になれば、その魅力的になった水際をどうするか、という工夫がいろいろできると思います。ただ、堀割があったことを忘れてしまうと、100年後に復活する可能性も薄れてしまうので、堀割があったことだけは忘れないようにしてほしいと思います。

陣内 都市は、現代においては非常にダイナミックに見直しをして、大きな改造も加えて魅力を取り戻す局面にきています。

ボストンの例ですが、古いまちとウォーターフロントの間が切れてしまう形で、高速道路が走っていました。それを大工事して高速道路を地下に埋め、地上を人間の手に取り戻し、海と古いまちを結びました。そういうことが公共事業でおこなわれていて、たいへん評判になっています。日本でも日本橋の問題を考えるさいにたいへん大きなヒントになってよく話題になります。堀割を掘り返せるかどうかはむずかしい問題があるけれども、そのぐらいの大きな構想力を持つということも重要かと思いました。また、岡本さんのプレゼンテーションをうけて、小坂さんが路地というものに価値を置く必要があるとおっしゃいました。ビルを建てる場合も路地を生かす。パリに、パッサージュといういい例があります。これは19世紀にたくさんつくられたもので、街区のなかに道をひきこんでガラス屋根をかけておしゃれなショッピング・ストリートとしたもので、そこが社交場ともなったわけです。それが最近また非常に見直され

てきていて、ガイドブックもいくつも出ています。パッサージュめぐりをする知的観光者もずいぶんいます。日本からも視察に行っています。銀座のかつてあった路地がそういうかたちで再び生かされていくこともおおいにあるでしょう。

そろそろまとめなくてはいけないのですが、小坂さんがおっしゃったように、銀座の方がたは誇りを持っていて、じぶんの利益に直接つながらないことでもまちのために貢献する。そういう気持ちで大勢の銀座をになっている方々が共通して持っている。これはたいへんすばらしいことで、これはある意味で建物にも言えるのではないかと思います。個々の建物のなかの機能ばかり追求するのではなくて、まちに貢献出来るお店づくり、空間づくりというものを、ひとつひとつの敷地のなかで考えていく。そしてそれを横へつなぎ、コーディネートして、都市全体をデザインしていく。ひとつひとつの行為が切れてしまうのではなく、横につないで行ってこそ、銀座の良さが生まれるのではないかと思います。時間が限られていたのであまりつこんだ議論はできませんでしたが、このシンポジウムの企画が継続していったら、もっと具体的なテーマあるいはシビアな再開発の問題をどう考えるかということを含めて検討しつつ、交流の場をもうけていきたいと思っています。

今日はパネリストの方、どうもありがとうございました。

まちの意見を取り入れた開発を

竹沢 どうもありがとうございました。まだまだお話を聞きたいことがたくさんあるのですが、時間がございませんので、今日はこれで終わりにさせていただきたいと思います。今日のこの会が、銀座がどんどん変化をしていくわけですけれども、ではどういうふうに変化をしていくかということの大きなヒントになってくれればと思っています。ご存知のように、周辺では大きな開発が起こっておりまして、東京のまち全体の風景は変わっています。それは銀座にも関係ないことではなく、そのなかで銀座がどうあるべきかということについて、銀座のみなさんが自分たちで考えていく機会にいただければほんとうにうれしいと思います。

今日の会をふまえて、第2回は「都市再生法と銀座」ということをテーマに開催する予定です。ぜひともおいでくださいますよう、お願いします。

最後に、銀座通連合会開発委員長の安西章次さんからご挨拶いただきます。

安西 先生方、ありがとうございました。みなさんはどうお感じになったのでしょうか？

私も銀座で生まれまして、銀座大好き人間を自負しておりますが、今日は私が思う

よりも銀座をほめていただきました。私たちは日頃商売で、いいことも悪いことも経験しておりますので、悪いことから銀座を危惧することもあるのですが、今日は非常に希望の持てる話をしてくださって、たいへんうれしく思いました。

銀座通連合会の開発委員会は、今年から私が、前年までの三枝さんの後任として委員長をさせていただいております。今、汐留のアクセス問題とか、近い将来の築地の跡地問題とか、銀座にはさまざまな課題がありますが、当面の課題は、昭和43年以来の銀座通りの改修です。それについては国土交通省がいろいろアイデアを考えておまして、まもなく具体的になってくると思いますが、それにはぜひ銀座のみなさんの意見を取り入れたものが生かされて道路ができる、まちができるということではなくてはいけないと考えております。銀座のこれまでの歴史のなかで培ってきた、これだけいいものを持っているわけですから、ぜひ生かしていかなければいけないと思っています。

先日テレビで、ニューヨークで150周年をむかえるある公園のことを取りあげておまして、そこでは著名なデザイナーがボランティアでデザインした椅子をオークションにかけて、その収益金で改修工事費を出したそうです。そのように、私たちも銀座のためにいろいろやっけていかななくてはなりません。国土交通省も私たちの意見を非常に期待しています。今日の話を参考に、みなさんも連合会のほうに、いい意見を言っていただければと思います。

今日はどうもありがとうございました。